

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

B6判
三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモツグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語一千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一六〇〇円
国語慣用句大辞典 A5 一六〇〇円
国語慣用句辞典 B5 二八〇〇円
国語史辞典 B5 二八〇〇円
日本語源辞典 B5 二八〇〇円
京都語辞典 B5 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 一五〇〇円
隠語辞典 B5 一五〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円
花柳風俗語辞典 B5 二八〇〇円
新語俗語辞典 B5 二八〇〇円
大正新語俗語辞典 B5 二八〇〇円

難訓辞典 B5 二八〇〇円
名乗辞典 B5 二八〇〇円
名数数詞辞典 B5 二八〇〇円
あいさつ語辞典 B5 二八〇〇円

新版(こ)ば遊び辞典 B5 二八〇〇円
類語辞典 B5 二八〇〇円
類義語辞典 B5 二八〇〇円
表現類語辞典 B5 二八〇〇円
新版文章表現辞典 B5 二八〇〇円

国語学全書 B5 一六〇〇円
白石大鑑 B5 二八〇〇円
林有仙他鑑 B5 二八〇〇円
堀井幸以他鑑 B5 二八〇〇円
井之口・堀井鑑 B5 一八〇〇円
天沼 草鑑 B5 一五〇〇円
榎垣 実実鑑 B5 一五〇〇円
前田 勇鑑 B5 一五〇〇円
堀井幸以鑑 B5 二八〇〇円
堀井幸以他鑑 B5 二八〇〇円
榎島忠夫他鑑 B5 二八〇〇円
中山 忠雄鑑 B5 二八〇〇円
荒木良造鑑 B5 二八〇〇円
森 隆彦鑑 B5 二八〇〇円
奥山 基朗鑑 B5 二八〇〇円
鈴木 三三鑑 B5 二八〇〇円
鈴木 広田鑑 B5 二八〇〇円
徳川・富島鑑 B5 二八〇〇円
藤原一他鑑 B5 二八〇〇円
神島・村松鑑 B5 二八〇〇円

季刊 連句 第18号

昭和六十二年九月一日発行



鳴立庵今昔 (南柏雑記 16) 1

連句のことなど 草間 時彦 2

「市中は」の巻 鑑賞 (IV) 東 明雅 6

歌仙の首尾時間 杉内 徒司 8

二十韻・評価と批判 草間時彦・高藤馬山人・鈴木春山洞
小野寺妙子・大畑健治・星野石雀 10

絶頂の城 (最終回) 14

芭流朱連句会作品 (二十韻) 鈴木 春山洞 捌 16

興流連句会作品 (歌仙) 馬場 彬風 指導 17

おくのほそ道紀行 俳諧のたねのこぼれて 秋元 正江 18
二十韻 四巻 20

暮雨巷に由縁の衆と俳諧興行 式田 和子 22

第二十二回 猫蕨会 25

捌 氏原 正雄 大窪 瑞枝 式田 和子
杉戸 金一 高瀬 美保 中川 哲

余興三巻 麦酒注ぎ 副島久美子捌
紅蜀葵 膝送り
巴里祭 膝送り

沙羅の会 沙羅の昼・沙羅咲く・合歓 膝送り 28

新刊紹介

橋間石 著「橋間石俳句選集」 13

草間時彦 著「淡酒亭歳事記」

桜井天留子 著「二人静」

馬場東夷 著「春障子」

質疑応答 21

雁帛往来・連句会案内 29

鳴立庵今昔

南柏雑記 16

雅

鳴立庵はJR大磯駅から徒歩で五分程の地にあり、このたび大磯町では大金を投じて、修理改築した。もともと、このあたりは昔はこよろぎの浜に続く景勝の地で、鳴立沢と呼ばれ、彼の西行が「心なき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕ぐれ」と詠んだ処だとされている。

庵はその昔、寛文四年(一六六四)のころ、小田原の崇雪という人が、はじめてこの地に草庵を結び、鳴立沢の標石を立てたというが、その標石も崇雪の墓標も現在残っているそうである。

その後、三十年ほど経って元禄八年(一六九五)、紀行家として知られ、俳諧師としても有名であった大淀三千風が、庵を再興して入庵した。これが鳴立庵の第一世の庵主とされている。その後、三世の鳥酔(一七六九没)、五世の白雄(一七九一没)、八世の葛三(一八一八没)など、春秋庵系の有名俳人が庵主となって、庵の名を高からしめた。それからもずっと続いたが、昭和になってからは、十八世鈴木芳如(在庵二十年・昭和四十七年没)、十九世山路閑古(在

庵十五年・昭和五十二年没)、二十世村山古郷(在庵十年・昭和六十一年没)と、それぞれ特色のある一流の俳人が庵主となり、鳴立庵の権威を高めたのであった。

私は芳如さんには、昭和四十六年、第一回俳諧時雨忌の時、一座した記憶がある。当時八十八歳の老嫗だった芳如さんは、小さくて細くて折れそうな体の中に、火のように熱いものを持っておられ、出された恋句の激しさにびっくりした思い出がある。閑古さんは都心連句会の方で、私も都心連句会とは親しかったからたびたびお目にかかった。閑古さんは「鳴立庵記」という二百五十頁余りにわたる連句入門書を書いておられ、一方の大家だった。古郷さんとも私は面識はあり、著書も多くいただいたが、古郷さんは連句には、御関心がなかったようだ。

それをとやかく申すわけではないが、新しい鳴立庵主はやはり連句の出来る方、すくなくとも分る方が望ましいと思っていたが、今度、俳人協会理事長の草間時彦さんが新しい庵主になられる由を承わり、躍り上がる程嬉しかった。それは私の希望通り、現代の俳人で、これほど連句を理解し、また堪能な方はないからである。この人を得て、三千風以下、歴代の庵主たちもさぞかし喜んでおられることだろう。早く御入庵のお祝いを賑かにやりたいものである。

祝 主得て鳴立庵の秋麗ら

明雅

連句のことなど

草間時彦

このごろ、連句が面白くなって来た。連句の会というところ、用をさしくって出掛けてゆく。半日たっぷり、たのしむ。連句が面白くなったのはいつごろからかというところ私の俳句と関係があるようである。少し、俳句のことを書かせて貰うと、私は水原秋桜子、石田波郷の門である。昭和二十八年、長らく休刊していた「鶴」が復刊した。私は「馬酔木」を脱して、「鶴」に参加した。私の周辺にはよい俳句の仲間がいた。小林康治、川畑火川、岸田稚魚、細川加賀、山田みづえ、まだまだ、たくさんのサムライがいて、当然、いくつかの句会があった。それらの句会は、それこそ、何でも、自由に、遠慮なく、物のいえる句会だった。私は、そういう場で育った。

幸福な期間は十五年ほど続いた。昭和四十四年、石田波郷が死ぬと、「鶴」の空気が、少しづつ、変っていった。やがて、俳人協会の俳句文学館建設の仕事が始まり、私はその専従になった。三十年近く居た会社を捨てることに、それほど躊躇もしなかった。

俳人協会専従になった以上、無所属となるべく、「鶴」を脱けた。これも、二十年お世話になった「鶴」だが、未練は

なかった。石田波郷のいない「鶴」は、それほどの魅力がなかったのである。

無所属になると、出席する句会がなくなってしまった。初めは、さばさばとして、気楽だったが、やはり、淋しかった。たまに出席する句会があっても、師匠格で出席するので私の句に対して率直な発言や批評などは存在しないのである。一つには私が世俗的な意味での俳句の上で偉くなってしまうからである。もう一つには、そのころから、俳句に女性が増して来た。今迄の「鶴」の句会は男ばかりで、女性の姿は寥々たるものだった。だから、何を言っても平気だった。女性が多くなると、句会の発言の尖鋭度が鈍化してくる。私にとって、句会は愉しいものでも、役に立つものでもなくなってしまった。

そういうときに、連句が私の眼前に現れた。

連句とは、それからの仲である。

私の連句は独学である。古典を学ぶことから始まった。実作は独吟から始まった。

俳句では水原秋桜子、石田波郷が私の師系である。連句の場合は師系がない。私の連句はどうなのかと言うなら、

飽くまでデイレットである。作品については唯美主義である。そして、俳人として、連句から距離を置いて、連句の姿を見ることが出来る。連句はたのしい。しかし、そのたのしきとは何かということにも、同じように興味がある。

デイレットということは、三十六句が満尾に近付いて行く共同作業の作詩過程に、もっとも興味を集中する。作品を後世に残そうという心は毛頭ない。

そういう私が、連句についてものを言うというのは、どんなものであるか。

しかし、自分勝手な発言になると思うが、最近の連句界のいくつかの問題を、デイレットの立場から気付いたことを言わせて頂こうと思う。

連句は時間がかかり過ぎるという声が多い。その通りだと思ふ。

二時間少して出来るとういという。それは、仕事のあとの夜の時間を連句に向けるからである。六時から九時までの公民館などの会場の貸時間と一致する。

明治、大正の句会の時間を見ると、大体、一日がかりである。午前十時ごろから開いて夕方まで。途中で、店屋もの弁当や丼を取る。午後一時過ぎにはじまると、夜までである。

東京での町の連座だけは夜だった。これは出席者が職人衆だったり、お店の番頭さんだったりするからである。そ

の代り、夜は十一時、十二時になった。誰もが歩いて帰れる距離に住んでいるのである。

夜、六時に始まり、九時までに終る連句の会を見ると私は情なくなる。王候貴族の遊びの連歌の末裔の連句が、何故、そんなに急がなければいけないのであろうか。もっと、ゆっくり出来ないものだろうか。結局、日本人は働き過ぎることなのであるか。

私は連句の面白さの一つに、終ったあとの雑談があると思っている。興奮が少しづつ覚めてくる。酒をふくむのもよい。甘いものをつまむのもよし。三十六句、座を共にした心易さと親近感が、座のわけへだてをなくして、自由なおしゃべりが出来る。

文台引おるせば即反故なり

つまり、反故になってからのたのしきだ。この雑談に参加出来ない人は、連句人の資格がない。

挙句が出て、満尾するかしないかのうちに、「電車の間がありますから、お先に失礼します」

では、どうにもなるまい。しかし、それでも三十六句は出来る。活字になった歌仙を見る限りに於て、そそくさと席を立った人がいるのか、いないのかは判らない。

結局、連句の面白さは作品にあるのか、それとも、作句の共同作業にあるのか、どちらかということだと思ふ。

私は、いつも申上げることになっている。

「連句はゴルフと同じだとお考え下さい。ゴルフは朝、出掛けて、夜に帰る。一日がかりでしょう。連句も一日が

かりの遊びなのです。

ゴルフは肉体の体操。連句は脳細胞の体操です。」

そう言うと、何か判ったような気がするらしいのである。連句の時間を節約しようという試みは、百吟を三十六句にするときからだだが、百吟の時代、もっと以前にも行われていたに違いない。その短縮作業が三十六句で止まるのか、それとも、二十句、十八句に進むのか、それは今、云々するのは少しばかり早過ぎる。もう少し、実作の積み重ねを見なければなるまい。

私は、歌仙の場合、それなりに短くすることを試みている。ただし、連衆が顔見知りで、いつも同座している者ばかりのときに限るのだが、オモテの一巡のところを文音で、前もって作って置くのである。文音といっても電話で済ませることが多く、TEL音だ。知らぬ顔や初顔合せのときは、オモテはそれなりに意味があるので、文音はいけないが、「いつもの顔ぶれ」ということだと、こういう手段に役立つ。内緒で捌が代作するのも容易で、当人に恥をかかせないで済む。

それから、出勝の場合、用いなかった付句の短冊のうち、あとで役に立ちそうなのを残して置いて、名残も進んで、そろそろ、連衆の脳細胞が疲れ果てたと思うあたりで、用いる。不思議によく付くのがあるものである。

捌は三十六句の進行中、いつも、連衆の疲れ具合や、気分を見ていなければならぬ。三十六句が終るころに疲れ切ってしまうように仕向けるのが、捌の醍醐味である。二

解出来る人が少なくなったことである。芭蕉の「古池や」の句の「や」が判らず、「古池に」と同じに解する人々が多くなったことである。

連句の場合、平句は、切字を持つことを許されないという理由でいつも、発句に対して劣等感を持っていた。もし、切字が権威を失ったとき、歌仙の場で、発句は平句三十五句を引き連ねて行くことが出来るのかどうか。

そのあたりに、明日の連句の危機があると考えたい。それにしても、現代俳句には、連句の平句をそのまま、俳句と称したような句が多過ぎる。いつ、そうなってしまうのか、殊に目立つのは、最近十年ほどの現象である。そういう、切字を用いない、平句まがいの現代俳句作者が、連句を試みたとき、「俳句が下手になる」かどうかである。

「連句をやると俳句が下手になる。」は、長い間、連句界の問題だった。だが、もう、この問題は捨てた方がよい。それに代る新しいことは、

「俳句をやると連句が下手になる」である。下手になるか、どうかだ。

十五句目ぐらいに疲れて智恵が湧かなくなってしまったのは、その歌仙の座は失敗なのである。

連句をやると、俳句が下手になると言う説がある。私は、その説を全面的に否定はしない。人には水平思考型と、垂直思考型とがある。俳人もそうである。垂直思考型の人は連句に向いていない。このタイプの俳人が連句をやっても、連句はうまくならないし、連句そのものが面白くないであろう。結局、連句から離れてしまうことが多い。

それでは、水平思考型の人はどうかというと、連句をやっても俳句が下手になるということはないと言いたい。連句が俳句にプラスになっているかどうかは判らないが、少くともマイナスはないと思う。

ただ、ここで気付かなければいけないことは「連句をやると俳句が下手になる」という言葉は、俳句を五年十年とやっている人を指しているのである。しかも、その俳句は、きちんと基礎が出来ていて、切字を使う技術も心得ている人なのである。つまり、発句の出来る人なのである。そういう俳句を作っている人が、たまたまの出来心で連句と馴染んだら、俳句が下手になると言うのが、この言葉の本旨である。

さて、現代の俳句を見てみると、いろいろなことが言える。第一に、現代俳句は急速に発句性を喪失しつつある。切字の権威の失墜である。切字を使える作品が少なくなったこと。それと同時に、もっと注目したいのは、切字を理

今の連句界には俳句の修業をした人が少ない。つまり、発句の出来ない連句人が多いということである。

男が居る。(女でもいい)俳句も連句も全く知らないが、文学には若干の興味がある。それが、たまたま連句にさわられた。俳句は難しそうだが、連句は面白そうだと、参加したのが病み付きになった。うまくなくて、捌をするようになると、発句を乞われることもある。俳句は出来ませんからと断るのはくやしい。そこで、俳句を学ぼうかと志す。しかし、誰に学べばよいのか、どの結社に入ればよいのか、俳句の雑誌を開いて、作品を読んでも、一向に、発句らしいのが見当たらない。困っていますと、彼は言う。

そういう人にこそ、「俳句をやると連句が下手になる」かどうかが問題である。

私は、本稿で、現代連句の発句はどうあるべきかを考えてみたかった。だが、もう、与えられた紙数も尽きた。別の機会に考えることにしたい。

(未完)

武翁賞作品募集

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、
九月十日(木)までに提出されたい。

応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

「市中は」の巻鑑賞(Ⅳ)

東明雅

8. 湯殿は竹の簀子佗しき

9. 茴香の実を吹落す夕嵐

(秋。人情なし)

(現代語訳) 竹の簀子を張ったわびしい湯殿の外は、夕嵐が吹いて茴香の実を吹き落している。

(付心) 其場・天象・時刻の付け。

(付味) 前句の「簀子わびしき」から秋の冷気を感じとり、それに夕嵐に散る茴香の実の風情を思い寄せた。茴香の香は湯殿にうつりよく、湯を浴る頃の夕なるにも叶い、両句相俟って品のよいさびしさを実感させる。「秘註」に「前句ノ寂ヲ受テ助ケタル付也。湯殿ニ夕嵐ハ句ナリ」とあるが、このように、前句にしつとりした付句を付けるのは、「猿蓑」の独自の境地と言ってよく、すばらしい付句である。

(転じ) 打越ははなやかな恋句、これはわびしい叙景の

句で、気分も風景も全く一転している。

(補説) ここに秋の句を出したのは、花の定座に、月を出そうとする意図からで、それは裏の三句目に花を出した時からの予定であろう。そうなれば、前句に「簀子わびしき」という句を出したのも、秋の句を次に出し易いために敷かれた路線であると考えられる。このように、芭蕉の俳諧は何句か先を常に考えて付けられているのである。(夕嵐は異時分を嫌わず、月を出してよい) 脇の句以下、人情の句が続いたのを、前句で断ちきり、さらに言えば「逆志抄」が言っているように、「外へ引出し変化したる也」¹¹内の句が五・六句続いたので外の景に転じたところもよい。

9. 茴香の実を吹落す夕嵐

10. 僧や、さむく寺にかへるか

(秋。人情他)

姿に付け現はしたもので、芭蕉俳諧に於ける象徴的手法の最も鮮明な一例である」と言っているのも至言である。

10. 僧や、寒く寺に帰るか

11. さる引の猿と世を経る秋の月

(秋。月の句。人情他)

(現代語訳) 托鉢を終った僧はひとりやや寒の寺に帰り猿と身すぎをともにする猿引は猿と月を眺める。ともに世外者の生活の姿である。

(付心) 向付・対付。観想。「三冊子」にこの例をあげ、「二句、別に立ちたる格なり。人の有様を一句として、世の有様を付とす」とあるが、前句の貧僧に対し、しがない猿引という別人物を出した向付。ともに世のアウトサイドを描いた点で向付の中でも、対付に近く、漢和聯句の手法(折口)とも言われる。

(付味) 曲斉は「街道の観想」と言い、露伴も「両者の行きあひたる何ともおもしろし」と言っているが、もちろん、現実には道ですれちがった景を写したのではない。ただ、観想の句であることには違いない。能勢氏は「両者は全く別種のものながら、漂泊する身のわびしい寒さが両者を結び、寂寥の気を充分に此句にうつし得ている」として「句ひ」の付けと見られている。

(転じ) 同じく能勢氏は「打越と前句の間には冷寥蕭殺のすさまじさまで感じられるが、この付句に於て、猿引を點出したために、前句と此句の間には、俳趣をおびたやはらぎの感加わっている」と言っておられるが、賛成である。

(現代語訳) 茴香の実が風に吹き散って肌寒を感じる夕暮れ時、托鉢の僧は自分の寺に帰って行くのだろうか。

(付心) 起情の付け。「夕あらしに僧の寒さうなるを見出しの付也」(注解)。右で起情の説明は十分である。「逆志抄」には前句を寺の庭と見て、それを寺と断らず、只僧を付けたと言い、宮本三郎氏は「茴香という薬種のしをり(余情)から禅僧の気味が浮かぶ」と説き、露伴は「蒼苔路滑僧帰寺 紅葉声乾鹿在林」という温庭筠の詩(朗詠集)を典故とする。

(付味) 能勢朝次氏は「や、寒く」の一語は、誠にこの一連に点晴したものであって、秋暮を吹きつくす嵐の冷寥さとあわれな僧の寒い感じが、この一語の中で微妙に言いとられつくしているを感じる。僧という言葉から受ける感から、「や、寒く」の感じへ、更に「寺にかへるか」と続く余韻のつづきなど実によい。「かへるか」のかと言った疑問的味嘆の語が、淋しい余情の流れを最後でぐっと堰き止め湛えて、はりきった力を感じさせる所など、また味わうべきであろう——として付味を「ひびき」としておられるのは、全面的に賛成である。

(転じ) 人物、場所は転じているが、寂寥・悲愁の気分は変化していない。

(補説) 草稿には「山に帰るか」とあるが、山は寺を指す語とは言え、前句の茴香に対し感じとして、やはり、寺の方がなつかしく、ふさわしい。兩山が「茴香の実に言ひかすめられている虚の相を、托鉢若しくは行脚の僧の実の

来 兆

来 兆

歌仙の首尾時間

杉内 徒司

歌仙一卷の首尾時間を短くする工夫をいろいろ検討したのは、会場の料亭「いろは」(東京都港区青山)が五時からすきやきを始めたというからである。五時前に首尾するにはどうすればできるか。

捌きが芭蕉の冬の句から立句を選んで、脇句を考えてきてもらう。

当日は第三起りで一時から始め、五時に首尾することは二四〇分に三四句を作句することであり、七分に一句治定すればよい。開会の辞などはごく簡単にする、とにかく巻き始めることだ。

義仲寺の大庭勝一氏との雑談の中で、俳諧時雨忌をやってみようと話がでたのは春ごろだった。案内は義仲寺関係十名、私の関係で三十名、併せて四十枚出して三十人は参加するという見通しをもった。

現在各種の連句大会で行われている小グループに分かれて連句を巻くこのパターンは、小人数ですきやき鍋を囲むことから便宜上思いついたのかも知れない。それまでこの種の連句興行では出席者がグループに分れる事なく、全員

がけ、時間を守り」とありますが、一句に費す時間は十分というのが大体標準であります。毎句十分づつで締切り、出勝ちの方法でやりますと、題を出されて俳句を作るのと大差のない努力で結構できてゆくのであります。と説明されている。作句だけの所要時間が六時間となるが、捌きの治定時間が一句何分を基準とすべきかによつていないのが惜しまれる。

この場合、出句に十分、捌きが治定に五分づつかかる、治定所要時間が三時間だから併せて九時間——二日ばかりで一卷満尾するという例も実際多く行われていると思う。

私が再び首尾時間に工夫をこらしたのは心敬五百七十年忌俳諧興行(昭和56・4・19)準備の頃だ。心敬忌はその五百回忌(昭和49・4・29)に第一回が興行されたが、翌年は細々と興行されたもののそれ以降は中絶されていた。この会場は神奈川県大江山麓の洞昌院のため都心からは往復の時間がかかるので、三時間で首尾できればと思つたのだ。ところがその準備期間に、鶴屋南北の没後百五十年を記念して南北忌が催される事になり、それを協賛して連句興行もする事になった。

その南北忌(昭和55・11・27)の記念講演に、河原崎国太郎が、芝居は二時間以内になければ観客に飽きられて仕舞うからだめです、という点に、首尾時間を考えていた私は深い印象をうけた。

そんな事があったので、それ以来は歌仙首尾時間は三時間を目標とし、一句の作句、治定併せて五分を基準と考え

で一つの俳諧を巻くことが普通とされてきたからである。今考えると何でもない事も戦後初めて、或は昭和初期初めての催しだというので計画を進めるにはいろいろの試行錯誤を繰返したが、特にスピードアップの点では工夫を凝らして興行した第一回俳諧時雨忌(昭和46・10・10)はどうやら計画通りに終了した。これを契機に発足した義仲寺連句会系統は首尾時間四、五時間が常識となっている。

当時義仲寺連句会の連衆は最も数が多く、それぞれ行動力があつた方が多かつたので各方面に亘つて影響を及ぼした。

さて、この作句時間にふれた著作は余りないが、「昭和俳諧式目」(昭和18年制定)の第三項には次のような記述がある。

連衆は一座の芸術的興奮を尚び、常に即吟を心がけ、時間を守り濫りに一座の空気を妨ぐる如き動作あるべからず。

この式目制定の推進者の一人である伊東月草(「草上」主宰)は著書『連句大概』(昭和21・9)に「常に即吟を心

るようになった。

然し、五分というのはこまかすぎる計算で実際的でないので、三時間を面毎に配分し次のような腹づもりでやっている。

表 六句 三十分 裏 十二句 一時間
名残表 十二句 一時間 名残裏 六句 三十分

第四回連句懇話会全国大会(昭和62・6・14)では実作の時間が二時間であつた。連衆の顔ぶれをみて打診すると、半歌仙では未完のうらみが残り、二十韻では時間が余りそうなので、思い切つて歌仙を首尾してみようと始めて首尾したが、捌きの身には少々きつかつた。二時間では作句、治定の楽しみが薄れる、歌仙にはやはり三時間が欲しい、必要だ。

私は今迄必要に迫られていろいろ時間について考え実行してみても現在は三時間を信奉しているが、他人に三時間説を強要するつもりはさらさらない。連衆に時間の余裕が充分あり、部屋の使用時間に制限がない連句会は三時間で切上げる必要はないし、時間一杯使つていい作品をつくつて楽しめばよい。

ただ現在は大勢が一堂に会し、他門と一緒にあって小グループに分れて巻く機会が多くなっているから、二、三時間で首尾できる経験をされた方がよりいいではないかと思つているだけだ。三時間首尾は捌きの考え方如何に依るが、現在三時間がよいと考えてる連句作家が何人位いるのだろうかを考えるだけで私は満足している。

◆「青しぐれ」を推す 草間時彦

「連句」に発表された二十韻のうち、一篇というと、福井隆秀さんと坂本孝子さんの「青しぐれ」（十一号 第二回武翁賞作品）がよいと思います。

二十韻は歌仙のミニアチュアでなく、運びも独自のものがなければいけない。そんな気がします。実作を積み重ねてゆくうちに、新しい美が生れるでしょう。焦らない方がよいと思います。

◆二十韻

高藤馬山人

わたくしはすでに老骨で、歌仙以外にこのごろの新しいところみの連句形式に不案内なので、御下命の二十韻の感想や批評など場ちがいの感じがして、とまどいました。恥をかきつもりでめくら蛇の気持で、――

季刊連句第十七号は「藤」の特集のようになっていたので、それに惹かれて、この

七篇の中からわたしは馬場彬風柳の「藤波」一篇を選びました。二十韻の式目も約束も知らない私が気ままに選んだものですから見当はずれかもしれませんが。

この連句一読していちばん素直に読めたことが第一番に挙げた理由です。年をとるとこのごろのカタカナ交りの新語は耳にも目にもなじみ薄く、理解に苦しむことも多々ありますが、この二十韻には、サミットとロッキードという定着した固有名詞だけなので、そういうことも原因だったかもしれません。

まず初めの四句のすべり出しもおだやかにすべり出して難無く、ウラの恋のわたりにうまい工合に乗っかっている感じになっています。そして、その恋離れもサミットの時事句が唐突のようであり、「ためらひつゝも押せる爪印」にあざやかな切れ味として美事でした。

ナオの六句のはこびも飄逸な付合が好ましく、なかなか変化に富んでいて、しかもるべき世紀の連句界を展望して「二十韻」を正しく伝承させ百花繚乱の世界を具現させるものもまた、只今の現代連句作家の取り組み方、創作作品のあり方にかかっていると云わねばなるまい。

季刊「連句」の中の、夥しい、素晴らしい作品を再三読み返して、今更のように目移りして困った。（第14号27頁下段）の「返り梅雨」をいただくことにした。折からの返り梅雨を狭庭に見てのことである。全体として都会的な瀟洒な作風・雰囲気漂わせているあたりは、素晴らしいという外はない。野暮な田舎者を魅了し眩惑し切つて憚らないものがある。前の恋と後の恋の変化が面白い。

◆新連句に関して 小野寺妙子

一花二月、二十句による新連句は季刊「連句」では毎号おなじみとなり楽しく読んでおります。歌仙の重厚感をやや欠くとして、現代生活にはびつたりの形式です。

現代は時間にはばられがちの毎日、日常の忙しさから解放され一日がかりでゆるりと連句を楽しむのが望ましいのですが、連句の中には時間のとれない人もいます。時

それがひとりよがりではなく、自然に流れていっているように思われました。

名残のウラでひまごやしごと賑やかな子供が末広がりに出てきたのも一巻のおわりとしてまことにこの一巻をめたく巻きおさめていくのに効果的だったと感じました。

◆二十韻讃歌 鈴木 春山洞

季刊「連句」創刊号誌上で東明雅先生が「連句が将来いかに変化変貌しようとも、絶対に失ってならぬものは、作品を創り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムである（同誌8頁）」と喝破されて以来、わたくしたちは、その現代連句観にある明るい自由な連観を加え得た気持がして、徐々に、わたくしたち自身が希求してやまない、それぞれの方向を模索的ではあるが辿り始めている。

折りしも現代連句は、永い沈滞期・連句暗黒時代を経て、何度目かの爆発的ブーム

間的に言うならば、歌仙一巻四時間でもなかなかで巻残してしまっています。次回に持越さず首尾し、歌仙の味わいをも持たせるのにこの二十韻は大変うま味のある形式だと思えます。

最初は歌仙形式で基礎をマスターし面白味を十分会得したら二十韻を楽しみ、いつでもどこでも手軽に首尾するのが自然かと思えます。第十号に二十韻の愛称公募について、雪が入った二十韻を「小面」と呼ぶならずばらしいとありましたが、私も、折角の新形式だから、雪も一巻に一句、冬の所で入れると引きめがあったら面白いと思えます。

関東関西以南の方々には美感が少なくて気の毒ですが、以北に住む者にとって、月より季節感に富み雪の自然程すばらしいものはありません。この季節を越さねば春も花も迎えられないのだという思いで暮らします。月・花と同様に格上げしては如何なものでしょうか。

新連句と言えば三十年代仙台で飯田岳楼氏が発行していた連句誌で、歌仙と共に新連句も盛んに行われておりました。序曲四句、本曲八句、終曲四句のもの、又一楽章

を繰り返して、ようやく連句復活期を確かなものとしていた。連句を志すもの・連句実作者たるものは、その連句を、もっと大切にすべきだと思うのだが、現代は慌しい時代である。師走ならず駆け廻る時代である。その時代の急激な流行にマッチして、「歌仙」より短い形式の連句が各所で提唱されている。それはそれで喜ばしいことであり、現代連句は斯くして発展するのだろう。その群雄割拠の中に明雅先生の「二十韻」が提唱された。「二十韻」に共鳴し讃歌を奏する所以は、連句は我等日本民族の独自の文芸形式であり、日本文学の持つ伝統的なもの（不易なるもの）を襲蔵しているものである。大流行した「百韻（四折）」から脱皮した「歌仙（四面）」が、今や更に脱皮して「二十韻（四面）」となり、現代人の生活にマッチした連句として受け入れられつつある。芭蕉が「歌仙」を振り翳して蕉風を樹立し俳諧文芸を大成し風雅の誠を追求したように、明雅先生の「二十韻」は現代連句にして出来る俳諧の新風を喚起するものであり、この「二十韻」を定植育成して花咲かせるものは現代連句作家であるわたくしたちでなければならぬ。更には来

長短短短短短、二楽章長短短長短短、三楽章長長短短の句並びのもの、第一楽章雪、第二楽章月、第三楽章花の楽章テーマのもの等、作品番号第〇番、〇〇指揮と捌も呼名が変えてあります。最終的には長短短のくり返しから変化して長短短短の短が七五になり次に七五、七五、七七、七七となり、浄瑠璃調をとり入れたりする所まで遊んだようです。式目にこだわらず、付味のみを重んじた新連句でした。

短歌の若手、俵万智さんの「サラダ記念日」が話題になっています。読者の大部分が、歌人以外の層で短歌集では例のない売れ行きとか、連句誌も一般人から関心を持たれるポピュラリティを獲得するよう発展してほしいものです。

◆ 『柚子』の巻 大畑健治

梅雨の最中に水不足が心配されますが、皆様は益々御壮健のことと拝察申し上げます。

去る六月十日付け御芳簡にてお申し付け賜りました、心に留まりました二十韻の提示とコメントを同封別紙にてお送り申し上げます。非才他の人の作品を云々する立場

なければよいとばかり心得ている傾向が強い。先に進むのは前があるからである。前とは前句だけではない。打越を含めた前である。つまり、三句の渡りによる第三句目の転じが軽視されているということである。その点「柚子」の巻（「季刊連句」第十二号）は三句の渡りが実にしっかりしている。これは打越や前句の時節・時分・天相・場・人情を踏まえた状況内容における転換を計っているからである。しかも、打越と前句との余情が前句と付句の余情に響いている。発句と脇句の温かさは脇句と第三の満ち足りた思いに重なり、第三と四句目の遥けき思いは満ち足りた思いに重なる。それは遥かなる点に喜寿の人を導き、老後の人の深き動物愛へと移る。以下この様にして余情の流れが形成されてゆく。事実あり得ることと付け進められるので、一卷に無理がない。「先に進む」とは、こうした余情の流れをいっているのである。事実あり得ぬ架空の世界を持ち込むと、独断と偏見の鑑賞がそこから生まれる。「柚子」の巻は、単に二十韻としての評価のみに留まらないものを含んでいるのである。この巻の短所を強いて指摘すると、「常磐津」の句から

では御座居ませんが、世間の風潮と併せて愚見を述べさせていただきます。

二十韻は、一卷を巻く時間を現代に合わせるころから生まれた形式かと存じますが、大矢数のように、早ければよいという風潮も変化してきていると思います。つまり、形式では短く、内容では焦らずに、という心得も大切にするのがよいのではないかと思われました。二十韻は短形式のため、一卷の構成が一日で見渡されます。恋句を二個所に二句ずつ出されますと、目障りになることがあります。また、月の句も初折の月を引き上げるか名残りの折の月を零すかして、変化を持たせるのも面白いかと思えます。その他季移りや季句の配置に臨機応変な処置を取られるのも、二十韻ならば容易かと存じます。折角の御発案による形式ですから、熟練者には相当自由な采配を任せられると、連句の自由さがもっと楽しめるような気が致します。

『濯東や』の巻（亀戸天神正式俳諧興行）や『夜水』（電通・山口美恵氏捌）も候補に挙げましたが、前者は正式のため除外、後者は面白いのですが「ビル」改築のムシ「社」美術館建つ」の居所の素材が目立ち

「東郷神社」の句に至る流れがややもたついている。一座一句物の「女」が二度用いられているのは、「人」との関係で読みの違う「女（おんな・ひと）」を意識的に可と認められたものであろう。

◆ 二十韻感触 星野 石雀

二十韻という俳諧の形式にはどんな功徳があるのか、私流に憶測すれば、時間的に連句を愉しめる今日の条件に合うものではないか。歌仙に慣れている人に言わせると、二十韻では何か物足りないようだが。ひと頃、私は林富士馬先生提唱するところの胡蝶を好み、やり句の存在をゆるさない、付句一句一句の詩性を大切にすゆき方に共鳴、実作的にも力をつくしていた。二十韻は胡蝶のような息苦しいほどの緊迫感はなくともすむ、遊び、風流ツギがあるようだが、私の周囲でも二十韻を試みるグループがある。私などは作句力ある連衆を揃えれば俳諧の形式は、付句の数は、さして問題にはならないと考えているが……。もともと私は二十韻を試みたことはない。だからこの種のコメントを書く資格に欠けている。

「車屋の黒」がどうもすっきり解釈できません。このような訳で、『柚子』の巻を選ばせて頂いた次第です。

「季刊連句」誌の御発展と会員の皆様のお健勝をお祈り申し上げます。

コメント

現代連句は架空と現実の入り乱れた作が多い。架空の世界で大飛躍した句が多い。これくらいの刺激がないと面白く鑑賞できないのが現代感覚であろうか。付筋もしっかりしていないため、読者も勝手に読めばいい、ということになるのだろう。その究極におけるものは恐らく西脇順三郎詩のシニールレアリスムのな実体を越えた世界であろう。逆に、これと対比的なのがベタリスムの連句である。事実は大切にすが付所の筋が曖昧で、雰囲気だけで何となく付けている、という手合いである。厄介なことに、それらの風潮——現代文芸を蝕んできた悪弊なのであるが——が、現代的であるとお題目に踊らされていることである。語句や素材の打越は避けられているものの、三句の渡りには無頓着である。連句は三十六歩皆先に進む、という意味も、後に戻ら

☆新刊紹介☆

☆「橋間石俳句選集」俳誌「白燕」の主筆橋間石氏は第十八回陀笏賞の受賞者。また連句の達人として著名。この集は未刊句集を含む八冊の句集から成る。昭和六十二年五月刊。発行所冲積舎。定価九、〇〇〇円。

☆「淡酒亭歳事記」俳人協会理事長草間時彦氏は美食家として有名。食べ物についての雑文、江戸についての随筆などを纏められたもの。昭和六十二年五月刊。発行所立風書房。定価一、六〇〇円。

☆「二人静」猫衰会の大先達、桜井天留子さんの俳句と文集。連句五巻を収める。第三回武翁賞の二十韻「竹皮を脱ぐ」の巻も掲載。昭和六十二年七月刊。発行所牧羊社。定価二、五〇〇円。

☆「春障子」著者馬場東夷氏は猫衰会会員。共立女子大学文学部勤務。自分で捌かれたものを主に九篇の連句と評論を纏めて出版された。昭和六十二年七月刊。発行所冲積舎。定価二、五〇〇円。

絶頂の城 (最終回)

東 明 雅

付勝練習歌仙

- 10 ボール逃げたる野辺の陽炎 井田淳子
 11 相方と合はず鳴物花見幕 和子
 十八句目
 治定 よういやさあと春を惜しみつ
 1 春のかたみと矢立取り出し 千町遊
 2 瀬戸の明石に鯛網を観る 井田淳子
 3 老いの盆栽長閑なる庭 慶子
 4 御室詣でて曲尺を買ひ 元力
 5 桑籠を背によぎる参道 杉代
 6 鐘供養とて所化も出揃ひ 雅亭
 7 しづしづ臨む曲水の席 麻子
 8 親子競ひて奴風揚げ 澄子
 9 こうなご添へて升酒が来る 和子
 10 島原太夫傘さしかけて 正雄
 11 弥生狂言師匠譲りて 哲
 12 部員勧誘まとふ春の蚊 和子
 13 骨までしゃぶり鯛の浜焼 正雄

14 善男善女鐘の供養に 美和
 15 春蚤ひと客に移せし 隆秀
 16 寝たまま舞へる惜春の母 よしえ
 17 水口祭支度早や終へ あかり
 18 仏の御座に惜しむ春の口 治子

治定の句、前句にべったりだが、打越からの転じよく、いかにも長閑な、そしてちょびりさびしい気分がよいので頂戴した。

1も惜春の情はあるが、付味がいかかか。2は地名はよいのだが、「鯛網を観る」が気にかかる。3は逆付的でおもしろいが、庭が野辺と打越である。4は釈教を出そうとされたのだろうが、「曲尺を買ひ」が何か唐突である。5も釈教の気味があるが、参道と野辺、よぎると逃げるも打越気味である。6ははっきり釈教の句で、おもしろいよい句である。「出揃ひ」とてには止めにした所など、神経が行き届いている。7は付味がいかかか。曲水の宴というもの実際に見たことがないので分からないが、前句の気分と合わない気がする。8は打越にボール投げの遊びがあるから、ここでまた風揚げしては困るのである。9は老練の句だが、惜しいことには酒も食物もすでに出ており、また、「来る」が「逃げる」の打越である。10は島原太夫が出て華やかで付味も上々である。止めが「てには止め」になっているのもよい。11はむしろ付き過ぎの感がある。12は角度をかえて新しい風俗を出したのがよい。13せつかく出た鯛の浜焼※

※を「骨までしゃぶる」とは残念で、実際は骨までしゃぶったにしても、別な言い方がありそうである。14は6と同じだが、6の方がおもしろい。15これもおもしろみを狙ったものだろうが、そつと春の蚤を人に移すなど、器用な人があるものである。16は病態か、17はおもしろいが、18の仏の御座で鳴物を合わせたら、仏様は御迷惑であろう。もうすこし陽気な方がよい。

さて、これで昭和五十八年の創刊号から続いた作品も、漸く半歌仙を終ることができた。はじめた時は、歌仙一卷満尾するつもりであったが、すこし永くなったので、この作品は半歌仙で止めることにしたい。序と破一段で終わったのは残念であるが、今までの分をまとめて掲載し、大方の鑑賞に資したいと思う。

絶頂の城

絶頂の城たのもしき若葉かな 蕪村
 夏鶯のこだまする溪 正江
 枕蚊帳熟睡の夢の安からん 樗晴
 啜る番茶に茶柱の立つ 東夷
 抄らぬ稿にしらじら月さして 隆秀
 新聞少年やや寒の道 たかし
 通草の実供へてありぬ岐神 貞子
 嘘のキッスが本物となり 昌子
 親が居て子が居て電話ままならず 妙子

ばりばりと炒るちぎり莧蕪 千町
 角乗りを終へて筏師まづ一献 杉亭
 江悠々と冬靄の中 天留子
 凍てる月ロシアの古都に妻とあり 正雄
 為すこともなくつい鼻毛抜く 孝子
 叱られて上目づかひに拗ねる犬 淳子
 ボール逃げたる野辺の陽炎 和子
 相方と合はず鳴物花見幕 遊
 よういやさあと春を惜しみつ
 昭和五十八年六月起
 昭和六十二年七月尾

次号からは二十韻の付勝俳諧を始めたいと思う。その立句は次の通りである。

蓑虫の音を聞に來よ艸の庵

芭蕉

気分を一新してこれに脇句をつけてもらいたい。この句は自他半である。脇句の付け方は「連句辞典」などに詳しく書いてあるが、念のため、要領を述べると、立句の蓑虫が三秋であるから、脇は初秋か、中秋か、晩秋か決めねばならず、人情は自他いづれでもよい。月の句はなるべくなら、第三で出したい。身柄のある句を避けるべきである。締切は到着十月二十日を厳守のこと。

芭流朱連句会 二十韻 山なべて 鈴木春山洞 捌

山なべて緑し空にきはまれり
木々にかこまれ落つる滝音

丹精の盆栽庭に出し入れて

衣縫ふ糸を切る鉄なり

月満ちてUFOの影あざやかに

踊りめぐる輪をくぐるひと

もつれあふ二人に鳴子鳴り続き

恋の別れの悲しかりけり

ブリッジに五彩のテープ飛び交ひて

ピアノの恩師想ふ少女期

沖繩の鈴石に耳傾ける

西独進出TV工場

貿易の摩擦に拒否権行使され

乱れし髪を梳く白き指

愛凍てし蝶に月光濡れかかり

寒夜を走る犬の遠吠え

札所寺弘法大師杖の跡

遍照金剛笠の文字なり

花片の泛べる甘き酒を飲み

春潮の香の巻く珊瑚礁

昭和六十二年五月二十日

於 県立生活文化センター

鈴木春山洞
井門可奈女
田中拓星
中野麻紗
古川任子

春山洞

巻きすすめられると共になごやかな雰囲気が生まれて来
ましたが、その中にも、びんと張った感じが、なかなか消
えませんでした。歌仙をよりコンパクト化した二十韻独特
のリズム四・六・六・四の調べが、連衆の心理に何かを齎
したことは否定出来ません。でも作品の手応えは充分で、
前半の恋の座の軽妙な運びに対して、後半の恋の座は艶麗
の中にベイスンスがうかがわれていて面白い出来栄であり、
発句の「山」に対して挙句で「海」が詠われたのは初心者
ながら素晴らしいと話合ったり、加えて全巻同字去りの工
夫もあり、都会風ならぬ四国・松山ならではの素材も散見
して、二十韻の定着感が深まっていると思われました。連
句二十韻は、現代にマッチした詩であると同時に、ますま
す連衆の実作を通して、絶えざる現代的詩精神の追求が行
われねばなりません。嘗っての歌仙を通じて、俳諧風雅の
誠が追求されていたように。

興流連句会

馬場彬風

指導

歌仙 紫陽花

紫陽花や雨欲しげなる佗び住ひ

動かぬよう動くでで虫

池の面かわせみ一羽横切りて

カメラを肩に若きハイカー

山脈の残月仰ぐ田舎駅

占城の辺り包む秋色

われ勝ちに葡萄の房に手を伸ばし

指ふれ合うてはと飛びのく

乱れたる想ひを秘めて黒真珠

通ひつめたる夜の裏道

アパートの窓に映りし月寒く

外は風友と酒酌む

積年の恨みを忘れ「書」を語る

雲から下りて論ず鄧さん

遥かなる大地に満つる億の民

抱く子の持ちし紙の風船

ふる里の花の思ひ出寺の庭

木の芽田楽味噌のあぢよき

屋根裏の雀の雛も果立ちせり

爺、婆、親子三代の家

渡り初め人の羨む晴れ姿

祝ひの餅を供ふ大安
床入りの帯解く気配夢現つ

いたはりつつも眠らせぬ夜

朝蟬の早や鳴く声の聞えける

喉しみ透る清水冷たき

お団子を頬張ってゐる峠道

何ごとおはす古き御社

七十の来し方おもふ月宵宵

菊の枕に無病息災

路地の奥煙を立てて秋刀魚焼く

東京タワー見上ぐ客人

高速の道路を走り羽田まで

円高不況に喘ぐ工場

川端は花に賑はふ屋台店

鞆を漕ぐ黄昏の空

昭和六十二年六月三十日

於 興流会 談話室

然 「俳諧の面目何と何とさくらん……一句
勳進の功徳はむねのうちの煩惱を舌の先に

はらって即応即仏としるべし」これは「徳

を正す」と云うことに、或は通ずるのかも

しません。つづけて「句作のよしあしは

まがりなりにやっておけ、げにもさうよ、

やよ、げにもさうよ」(路通篇、勳進牒)

其角跋文)は「惟れ和す」の情でしょうか。

又「歌の道は昔の人あまりに執心し侍り

し程に、或は一首に命をかへ、難をおひて

は思ひ死にしたるためしも侍りき。連歌は

さやうの事は侍らぬ事なり。ただ当座の逸

興を催すまでなれば、さのみ執着執心なき

うへ、一座に更に余念なければ、悪念もお

のづから盛りに侍べる事なし」(二條良基、

筑波問答)

そのようなわけで、今年の正月からは、

膝送り歌仙を宗匠交代にて楽しく巻いて居

ります。尤も出来のよいのが嬉しいのは、

勿論のこと、今迄に二十韻、歌仙合わせて

やと三十巻近く巻きましたが、要はこれ

からでしょう。連衆は三年間、増えも減り

もせぬ良きお仲間。長老の田原竹無齋さん

がどうこなすかと考えて居られるようです。

(彬風記)

